

総論

満点	50点	目標得点	38点	試験時間	90分	偏差値	74	
大問数	3	小問数	24					
[解答形式]	選択式	20/24問	記述式	3/24問				
[難易度]	C	2/24問	B	15/24問	論述式	1/24問	A	9/24問
※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す								

Topics

- 1…「古漢融合一題＋現代文二題」の大問三題＝例年通りの出題形式。
- 2…表向き古漢融合問題である大問一は、実はそれぞれが独立した古文問題と漢文問題二題。古文・漢文の基本的な読解力が問われている。
- 3…現代文は二題とも哲学的論考が出題。早大各学部の中でも最も抽象的で硬質の評論を課す傾向は相変わらず。大問二は言語論。対比構造を重視した読解が有効。大問三では二〇〇六年度から登場した現代文の要約問題が本年度も継続。

こんな力が求められる！

古文は語句・文法の基本的知識に習熟するだけでなく、文章の構成や人物関係を的確に整理する「論理的読解力」も求められる。漢文は例年古文に比べて平易だが、ほぼ毎年出題される返り点の問題は比較的他の設問より高度なため、頻出の句法や語句の知識に加えて文型（主語・述語などの文の構造）を意識した定期的な読解練習が不可欠。

現代文は、漢字を含めた語彙、論理的思考力、頻出テーマについての問題意識を積極的に高め、高度な評論文に対応できる読解力を育成する必要がある。また法学部では要約問題がここ数年出題されているため、文章構成を適切に把握し、簡潔な言葉で要約する記述力の向上も意識したい。

具体的な目標としては、お茶ゼミOSテキスト所収の現代文・古文問題で、平均七割～七割五分以上の正答率を維持できること。また、センター試験問題で八割五分（一七〇点）以上の得点を可能にすることを目標にしてみるとよい。

大問別分析

（一）

予想配点	15/50点	時間配分の目安	25/90分
文章の種類／ジャンル	現代文・古文・漢文・古漢融合／ 現代文・古文・漢文・古漢融合／ 現代文・古文・漢文・古漢融合／ 現代文・古文・漢文・古漢融合	評論・随筆・小説・物語・詩歌・その他 評論・随筆・小説・物語・詩歌・その他 評論・随筆・小説・物語・詩歌・その他 評論・随筆・小説・物語・詩歌・その他	
[出典]	古文：内藤文草「寝ころび草」 漢文：王充「論衡」		
[文字数]	古文 約一三〇〇字 漢文 約二五〇字		
出題形式	選択式九問、記述式一問 「段落区分問題・段落冒頭の抜き出し」		
お茶ゼミカリキュラムとの関連	高三OS国語・古文・十二月・一月期 高三冬期難関大漢文講座		

●学習対策

古文は、語彙・文法の基本的知識を踏まえるだけでなく、文章全体の構造までに意識を向けた、文章全体の要旨を捉える読解練習が必要。

漢文も、単なる句法の知識に留まらない、全体の要旨を捉える読解練習が必要。

●内容分析

古文は松尾芭蕉の弟子の一人である内藤丈草の手になる随筆。人生の苦しみについて述べたものだが、特に「女性の苦しみ」を述べた部分が文章の大部分を占める。漢文は故事の真偽を評する文章で、難関大の過去問では、よく見かける構造「故事の説明とその批評という構造」の文章。

●小問別／難易度・出題内容分析・解答のポイント・思考プロセス

※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す

問一ノ一「難易度B／古典文法問題／ロ」

早稲田全学部を通じて頻出の、助動詞「る・らる」の意味識別問題だが、なめてかかると間違える。傍線部5は「自発」であるが、直前の「親に」に引きずられて「受身」と解釈すると、正答が得られない。形式判断での解答を阻む出題者の意図が感じられる。

問一ノ二「難易度C／段落区分・文章構造把握問題／二段落Ⅱくる夜も 三段落Ⅱなほも心」

三段落目冒頭を、「段落の始まり」として見つけるのは容易だが、二段落目を見つめるのが難しく、結果的に正答しにくい問題。とはいえ、二段落目が把握できなくとも他の小問への影響はなく、ある意味捨て問。

問一ノ三「難易度B／意味把握問題／リ」

文脈を加味して正答を探ること。傍線部直前「明日ありと思ふ心にほだされて」、また直後の「この道的心にかからぬにはあらねど」の部分をヒントにリを正答とする。

問一ノ四「難易度A／意味把握問題／ル」

早稲田・法の合格を望むなら、絶対に落とすはならない問題。「世のいとなみ骨をたゆむる」が生計を立てるために骨身を惜しまず働くことを述べていることはすぐにわかる。「粉骨碎身」など、「骨」が「努めること」につながる意味をもつことぐらいは日本語の当然の知識。

問一ノ五「難易度B／意味把握・理由説明問題／ネ」

直後の文「詠めをしき門の雪遊びは、乳母がためにいなまれ、手に入れたる花の胡蝶も、弟にあなどられぬ」が傍線部の具体的説明となっていることを読み解く。

問一ノ六「難易度B／意味把握問題／ラ」

幼少期より女性が「女としての振舞い」をその身に修めなければならないことを述べた箇所であることを念頭に、「はしちかからず」端近からず」を読み解けば、古典常識を加味しつつ、正答にたどりつける問題。

問一ノ七（I）「難易度B／漢文・本文読解問題／ケ」

文章全体の趣旨を踏まえて、空欄部のある箇所が何を述べようとしているかを把握して正答を導く問題。本小問リード文にある「腕をつねる故事の方を引用しつつ、その信憑性について論評したものである」との指摘も参考にしつつ考えれば、「腕をつねる故事」の「虚」を空欄部Aで述べ、それと対比的に挙げられた故事（母の歌声を聞いて、母の来訪に気がついた故事）の「実」を空欄部Bで述べていることはわかってくる。

問一ノ七（II）「難易度A／意味把握問題／ケ」

返読文字「以・与」などの基本知識をもとに、丁寧に解説すること。フ「親も子もともに」、ロ「親子のどちらか一方の身体に異常があると」などの記述は、本文の内容を正しく捉えたものとは言えない。テは「身体に病が生じ、心にも異常を感じる」として「身体」と「心」とを並列的な事項と捉えている点で不適。エは「真の孝行と呼べる」という評価付けは、傍線部の文中ではなされていないから×。

問一ノ七(Ⅲ)「難易度C／意味把握問題／キ」

各選択肢の内容が多少紛らわしいため厄介さはあるものの、(Ⅱ) 同様丁寧な読解に徹すれば、正答は得られるはず。「能・不能」の句法を正しく捉えた選択肢を選び出すことで対応できる。サは「小さな動きをささえる力」という部分、メは「子どもの時分は」という部分、ミは「目に見えない微細な力」という部分が、それぞれ「精気能小相動」の説明として不適。ユは「偉大なこと」という部分が「不能大相感」の部分の説明として不適。

問一ノ七(Ⅳ)「難易度B／返り点問題・文型把握問題／エ」

文頭の動詞「聞」の目的語の範囲が「曾子之孝、天下少双」であること、および「為(ために)」の後に「曾子之孝、天下少双」が省略されていることを正しく捉えられるかがポイント。「曾子の親孝行さについて天下に並ぶものはほとんどない」ということを聞き、そのために、世の人が『母が腕をつねって息子に知らせた』という、現実にはあり得ない故事として生まれた」というのがこの文の意味であり、そしてこの問題文全体の結論である。

【二】

予想配点	15／50点	時間配分の目安	30／90分
文章の種類／ジャンル	現代文・古文・漢文／	評論(言語論)	随筆・小説・物語・詩歌・その他
【出典】	森本和夫「沈黙の言語」		
【文字数】	約三七〇〇字		
出題形式	選択式六問、記述式二問「漢字の書き取り／抜き出し問題」		
お茶ゼミカリキュラムとの関連	高三OS国語・現代文・十二月・一時期		

●学習対策

- ① 「言い換え」と「対比」の構造にもとづいた評論の読解練習。
- ② 「本文を意味段落に区切る」訓練。
- ③ 「通説・常識↑常識批判(筆者の立場)」という対比構造が「ありきたり」ではない評論文(どちらが「常識」かわかりにくい文章)に慣れる必要がある。

●内容分析

本文の意味段落

- ① 意見提示 (1段落)  
言語生活Ⅱ人間生活全体
- ② 証明1・1 (2〜3段落)  
赤ん坊にも言語生活はある
- ③ 証明1・2 (4〜5段落)  
「叫び声」も言語の中に組み込まれている
- ④ 証明1・3 (6〜9段落)  
言葉を成立させるのは聞き取る側(おとなの側)
- ⑤ 証明2・1 (10〜15段落)  
「叫び(自然)から言語(文化)が生まれた」  
⇔ (のではなく)
- ⑥ 証明2・2 (16〜19段落)  
「言語が先(もともと存在した)、叫びを取り込む」  
「言語は意味を支持する記号(道具)」  
(言語生活は人間の生活の一部)  
⇔ (ではなく)

「言葉と言葉が共鳴し合って、言葉そのものの世界を表示する」  
「言語があつてはじめて人間は人間になる」  
(言語生活は人間生活の全体)

- ⑦ 補足 (20段落) 「近代ヨーロッパ的思考法」ではなく「ポスト構造主義的思考法」

⑧再確認・まとめ (21～22段落) 21段落Ⅱ2～3段落、22段落Ⅱ1段落

●小問別／難易度・出題内容分析・解答のポイント・思考プロセス

※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す

問二ノ一「難易度A／漢字の書き取り(知識問題)／X 触発 Y 擬人」  
書いて当然の基本事項。

問二ノ二「難易度B／記号形式による脱文挿入・欠文補充問題／ハ」

挿入文中の指示語に注目。「赤ん坊の言語生活」Ⅱ「これ」Ⅱ「赤ん坊も音を聞いているのであり、周囲の人間たちの声を聞いている」(空所C直前)のつながりが見えればよい。空所前後の厳密な言い換え関係の読み取りが必要で、少々厄介な問題。

問二ノ三「難易度A／傍線部理解・傍線部説明問題／ト」

傍線部と一つ後の文との「言い換え」関係へ「決定的な何物かが欠けている」Ⅱ「言語生活の欠落」を見抜けばよい。解き方は簡単だが、「言い換えを探す」という視点を外すと何を選んでよいかわからなくなる問題。へ「音声に頼らないで視覚によってのみ意思伝達が行える手段」が×。ト「言語体験」が本文と一致。チ「表現力」が×。リ「コミュニケーション能力」が×。又「思考様式」が×。

問二ノ四「難易度A／傍線部理解・傍線部説明問題／ヨ」

「どういうことか」という設問の問いかけに対し、各選択肢が「くから」と理由を答える言い方になっている部分に振り回されないように。本文中の内容を正しく整理した上で解く。6～9段落を「おとな↓赤ん坊」の対比で整理。

ル 「叫び声から言葉へと育まれる：そういう変質現象」が矛盾。

ヲ 「思考体系によって産み出される」が矛盾。

ワ 「文化へと変容」「叫びの段階はまだ自然の声」が矛盾。

カ 「音と声の区別」という対比は本文の論理構造と一致しないのでズレ。

ヨ 「赤ん坊自身が言葉を理解しているというわけではない」が筆者の意見と一致するかどうかは即断できないが、他の選択肢が容易に消去できてしまったので、6～7段落に一致しているとなししてよい。

問二ノ五「難易度B／傍線部理解・傍線部説明問題／レ」

10～15段落の対比構造の中に傍線部を位置づけて考える。

・自然から文化が発生したと考える ↑↓文化と自然の間にははっきりとした切れ目がある

・自然の声としての叫び声

・文化の声としての言葉へと移行する

・一種の進化論

・文化には始まりはない  
・それはもともと文化としてあった

・言語には起源はない

・言葉が叫び声を言葉にする

・言葉の方が叫び声より先だ

・言葉の世界があつてはじめて、叫び声も

その世界のなかへと取り込まれる

・文化・言語は人間の生活全体なのだ

タ 「叫び声のように言語による意思伝達の困難な音声は文化の所産とは呼べない」が矛盾。本文全体を理解してからの消去法で行くなら、「言葉：そこから意味も生まれてくる」が16段落以降と矛盾と考えた方が楽。

レ 本文の対比構造とは一致するが、「叫び声の理解も言葉による判断や認識を通じてなされている」が筆者の意見と一致するかどうかは即断できないので保留。

ソ 本文の対比構造とは一致するが、「その声が指し示す意味が理解できるようになる」が16段落以降と矛盾。

ツ 「言語は：生活のあらゆるものを背後から支えている」がズレ。本文のこの箇所では「言葉（文化）が先か、叫び声（自然）が先か」という対比構造を提出しているのだから、論理の枠組みがズレ。消去法で行くなら、16段落以降と矛盾と考えた方が楽かもしれない。

ネ 「人間が自然との共生から進化して社会生活を営むために」が対比の反対側。

以上のように分析してみると、「レとソで迷わせて、あとは相对比较によってレを正解とする」というのが出題者の狙いではないか、と思われる。

問二ノ六「難易度A／記述形式による抜き出し問題／『表示されるもの』

基本的な解法に基づいて正答を得られる問題。まず17段落内部での対比構造の中に傍線部を位置づけて考える。傍線部は、直後で「～ことではない」と否定される部分にあり、筆者の見解には相容れないものである。ところで17段落冒頭「すべてのものは言葉になる」との筆者の見解は、15段落最後にある「言語がすべて」と対応するが、16段落は、「いいかえれば」で始まるところから、この15段落最後＝17段落冒頭の筆者の見解の言い換えとなることは、明らか。すなわち傍線部4のある17段落と16段落は対応するのであり、その16段落中「奥に表示されるものが隠されているのではない」という箇所が、筆者の見解に相容れないものを指摘していることを見抜く。傍線部と対応する箇所である「表示されるもの」を抜き出せばよい。

問二ノ七「難易度A／傍線部理解・傍線部説明問題／ウ」

16～19段落の対比構造の中に傍線部を位置づけて考える。

ナ 「言語能力の獲得には先天的な条件が必要」が矛盾。

ラ 「おとなによって語られる言語が赤ん坊の成長過程で内在化されることを通じて言語世界が成立する」が矛盾。

ム 「言葉によるコミュニケーション：そこに記号化を拒否する主体的な意思が存在している」という論理のうち、「記号化を拒否」という部分が本文の対比構造からは導き出せない。

ウ 本文の対比構造の「筆者の意見と同じ側」に一致。

キ 本文の対比構造では「人間が言語を道具として使う」のではなく「言葉と言葉が互いにこたまし合いつつ成立している言語世界の中に組み込まれて人間は生活している」のだから、「幼児は意味も分からずに言葉が発することができ」では対比構造の「筆者の意見」と一致しない。

ナ・ラ・キは2～9段落と矛盾していると考えて消す方が楽かもしれない。

問二ノ八「難易度B／内容一致・主旨理解問題／ク・マ」

総合的な難易度をBとしたが、クを正解として選び出すのは容易なので、こちらは難易度をAと考えて欲しい。マを正解として選び出すのは少々厄介なので、こちらは難易度をBと考えて欲しい。

ノ 「叫び声から言語世界が形成される」が4～7、13～15、21～22段落と矛盾。

オ 「言葉を：言葉の彼方の意味の世界を支配するために用いている」が16～17段落と矛盾。

ク 「記号的言語の交換以外の通じ合いもまた言語であり、：そこには言語以前の言語が成立している」が14～15段落と一致。

ヤ 「言語は契約による制度という共同の道具として創設された」が14～15段落と矛盾。

マ 「言語がわれわれの意識的自我を超えて存在する」が本文のどこに対応するかわかりにくいので、保留。

ケ 「言葉による通じ合いは、意味の交換のネットワークが機能することによってはじめて成立する」

「意味の交換のネットワーク…この種の関係性こそが人間を本来の人間たらしめている」いずれの論理も16〜19段落の対比構造において「筆者の意見とは反対側」の意見に対応するので×。最終的に、消去法でいくと選択肢マが残る。そこで再検討すると、「言語がわれわれの意識的自我を超えて存在する」は16〜19段落の対比構造の「筆者の意見と同じ側」に対応するとみなせるため、クに加えてマを正解とする。

## 【三】

予想配点	20/50点	時間配分の目安	35/90分
文章の種類／ジャンル	現代文・古文・漢文／評論（制度・規則論）・随筆・小説・物語・詩歌・その他		
〔出典〕	鬼界彰夫「私」はなぜ存在するのか―ウイトゲンシユタインから原制度的世界へ―		
〔文字数〕	約三五〇〇字		
出題形式	選択式五問		
お茶ゼミカリキュラムとの関連	高三OS国語・現代文・十二月・一学期		

## ●学習対策

本学部のようなハイレベルな現代文問題に対応可能な能力は、突然降って湧くものではない。他学部も含めた早大・上智大などの高度な問題に数多く挑戦し、着実に実力を培う必要がある。その際、何となく読み、適当に答え合わせをして過去問をやり捨てるといった態度はもちろん厳禁。同内容の反復や対比構造といった「文章構成」を意識しながら本文を整理し、そこに書かれる内容を自らの「問題意識」として吸収しつつ、分からない語句を丹念に辞書で調べて「語彙力」を充実させるといった、総合的な現代文力の錬成を心がけるべきである。

中でも、問三ノ二や問三ノ四のような、傍線部の趣旨理解を問う説明問題が他学部を含め、設問の大きな比重を占めている。「指示語」や「接続語」などの論理展開を示す目印を手がかりに、そこに書かれている筆者の表現を正確に咀嚼して、自分のものとして理解しながら読むという最も基本的な読む力の訓練を欠かすことのないようにしたい。学習に余裕のある諸君は、新聞のコラムや新書などまで読書の幅を広げ、普段から法学部の出典となるような、大学に籍を置く研究者の文章を目を通しておくのも効果的である。

設問は長文の選択肢が多いので、普段から選択肢の正否の「根拠を意識して」解答する習慣を。また、ここ数年定着傾向のある要約問題に対処すべく、一〇〇字程度の本文要約に挑戦することも必須の作業であろう。記述対策として、過去問以外にも国立公立大学の問題、特に東京大学の二次試験の現代文問題に挑戦するのも良い。

しばしば誤解されるが、現代文は決して感性のみの成長不能な教科ではない。ただ、要約の採点など、現代文は一人で学習することが困難で、正しい指針を与えられる場が少ないのが現実である。お茶ゼミの授業を含め、有効な学習の機会を貪欲に活用してもらいたい。

## ●内容分析

本文は、制度を規定する規則の意味・概念がどのように成立するのかを哲学的に考察した文章。大問二二に比べ、抽象的な内容を硬質な表現で記しており、手強い印象を与えるかもしれない。ただ、「第一の可能性は、〜」「第二の可能性は、〜」「二例として〜」「以上の考察が示しているのは〜」など、議論の展開を示す目印が段落の冒頭に明確に記されており、その点を意識しながら読解すれば、文章構造の把握はそれほど困難ではない。「テーマは何で」、「筆者は何を否定している」、「何を肯定しているのか」という端的な全体像を思い描くことを優先しよう。具体例の分量も多いので、予想外にシンプルな本文整理ができるはずだ。

●小問別／難易度・出題内容分析・解答のポイント・思考プロセス

※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す

問三ノ一「難易度B／空所補充問題／X ロ Y 才」

早大法学部では頻出の空所補充問題。(X)は、直後の「という制度本来の役割」に注目して、「制度」についての記述のある第1段落に注目する。あくまでも「我々」の「人間的世界」を支配している「制度」なので、イは「社会の方向」がおかしい。(Y)はトとまぎらわしいが、二つ目の空欄直前の接続語「すなわち」に注目すると、「制度の存在」と「規則の成立に先立って」が言い換えとして調和せず、排除可能となる。そこで、より広く文章を眺め、前段落で述べられた「第一の可能性」との対比関係を踏まえて解答する。

問三ノ二「難易度B／傍線部理解・傍線部説明問題／カ」

傍線部の趣旨を答える説明問題。まずは、傍線部に「それら」という指示語が含まれていることに注目し、それ以前の文脈を丁寧に辿って内容を押さえれば、解答は導ける。あくまでも「解釈」そのものの多様性であって、ワのような「解釈をするため」の「多様な立脚点をもたざるをえない」では、本文の内容とずれてしまう。

問三ノ三「難易度B／傍線部理由説明問題／ツ」

条文の理解を支える「原制度概念」の確立は何によって可能になるのかを、常識やフィードバックに頼って作り出すのではなく、第3段落以降の「第二の可能性」について説明する記述から見出すことができたかどうか勝負。

問三ノ四「難易度A／傍線部理解・傍線部説明問題／ム」

傍線部の趣旨を説明する問題。問三ノ二と同様に、ここにも傍線部に「そうした行為」という指示語が含まれている。その指示語の指示対象を正しくつかめれば容易。

問三ノ五「難易度B／内容一致・主旨理解問題／オ」

本文の内容に「合致しない」ものを一つ選ぶのだが、この間の選択肢が本出典の直前までの文章から任意に抽出して作られていることで、解答を大変厄介にしている。例えば、ノ「それを使って真剣に生きていく」や、ク・ヤの「貨幣ごっこ」などのように、問題文には直接述べられていないが、出典の直前までには記されているなどという不可思議な状況が作り出されてしまった。このような残念な事態に直面した場合であっても、あわてて目に付いた選択肢に飛びついてはならない。「合致しない」ものは「一つ」しかないのだから、選択肢相互を比較・検討した上で、「書いている、書かれていない」という基準で正否を判断することを諦め、「問題文の趣旨と顕著に齟齬をきたしているもの」を優先して選択するよう方針転換をする、冷静な判断力によって活路を見出したい。すると、オの「人々の貨幣に関する一致が行為と判断においてではなく、制度と習慣から生じている」という部分が、第3段落前半の記述と明らかに矛盾することに気づくはずだ。

問三ノ六「難易度B／本文要約問題」

・ 制度を規定する規則に関する概念は、概念同士が相互に定義し合う体系を構成し、多様な解釈が存在する仕組みからではなく、実践の最小単位である原制度概念が、言語的な説明以前の実践の参加を通じて、人々との行為と判断における一致をみることから成立する。(一一〇字)

一一〇字～一二〇字で本文を要約する問題。法学部の記述問題は、設問文が詳細に記されているのが特徴。まずその指示をよく読んで、「何を書くか」について解答の骨格を組み立ててから書き始めるべきである。今回も「制度」「解釈」「実践」の三語を用いるという指示をむしろヒントにするとよい。その指示と本文の構成と照らし合わせ、「筆者の問題提起」(第1段落)↓「第一の可能性の否定」(第2段落)↓「第二の可能性の肯定」(第3～5段落)というかたちでまとめると、時間内での確な要約を書き上げることが可能になる。